

どうです、りっぱな凧でしょう。わたしの父が、作ったんです。

これ、わたしの、だからです。

わたしのいなかでは、男の子が生まれると、凧を作ったものです。

父は、魚屋でしたが、凧作りが大好きで、ご近所や、お客さんの家で男の子が生まれると、凧作りをかって出たそうです。

「どつちが本職だか、分かったもんじゃなかったよ。」

と、母は言っていました。

父は、凧をあげるのも大好きで、五月のお節句の凧あげ大会には、たたみ二まいぐらいもある大きなのを作つて、町のわかいしゅうとあげたそうです。

凧あげ大会が近づくと、父はもう仕事の手につかなくなったといいます。

凧のほねにする竹を山に切りに行ったり、それを組み立てたり、絵をかいいたり、その紙をはったり、糸目を付けたたり、しっぽを下げたり……。

しかたがないので、母が一人で魚を売ったり、さしみを作ったり、開きをほしたりしたんですって。

父は、八幡太郎義家とか、源義経とか、武田信玄といった、よろいかぶとのいわゆる武者絵をかくのが上手でした。

「すみをたっぷりふくませた太い筆で、勢いよく、一気にかきあげる様子は、見ている本当に気持ちよかったですよ。」と、これは、母の思い出話です。

わたしが母のおなかにできた時、父はとても喜んで、生まれてくる子は、もう男の子だと勝手に決めちゃって、どんな凧を作つてやるうかと、うれしそうにしょっちゅう考えていたそうです。

ところが、生まれたのがわたしでしょ。父がどんなにがっかりしたことか。それでも、父は、わたしのために凧を作ってくれたのです。

それが、この六角凧なんです。

父は、武者絵ばかりかいていたものだから、女の子向きの絵を知りません。考えに考えた末にかいたのが、この巴御前です。

巴御前は、女ながらもよろいかぶとに身を固め、なぎなたふるって、寄せくる敵を、ばったばったとなぎたおしたという、勇ましい人です。

父つたら、まるで、その凧の絵に合わせるみたいに、わたしに友江と名前を付けたんです。

わたしが生まれたころは、日本が領土ほしさから中国にせめこんで、その戦争が、だんだん大きくなっていました。

ご近所でも、八百屋のおじさんや、とこ屋の兄さんや、ゆう便屋さんなどが、さっそく兵隊にとられたんですって。そして、間もなく父も戦争に連れていかれちゃいました。

生まれたての赤んぼのわたしをかかえ、女手一つで魚屋をやらなければならなかった母は、どんなに苦労したかしません。

ゴムの前かけをしめ、長くつをはいて、うるこのはりついたうでで、ときばきと魚を切る母、その背中でのけぞって泣いていたわたし、そんなすがたを想像すると、今でもきゅんとむねがいたくなります。

ところが、父ときたらもの気なもので、兵隊として中国へ行ってまでも、凧を作っていたんですって。

そのことは、父が戦死した後、遺品をとどけてくれた戦友の青野さんから聞いて分かりました。

父は、中国の少年がむかで凧をあげているのを見つけると、すっかり興ふんしちゃって、それを手に取って見

せてもらったそうです。

むかで凧というのは、小さな円い凧を何まいもつなげたものです。凧好きの父でしたが、むかで凧を見るのは、初めてだったそうです。

凧は日本だけのものではなく、世界じゅうどこにもあるんだということを知った、父の感激はどんなだったでしょう。

父が糸の付け方や、凧と凧のつなげ方や、バランスのととり方などを、あまり熱心にいつまでも見ているので、少年は、凧を取られやしないかと心配したそうです。

戦地では、凧作りの材料を集めるのも大変でしたが、父の熱心さに戦友たちも協力して、竹や紙やひもなどをさがしてくれたそうです。隊長さんまでが、絵の具を取り寄せてくれたんですって。

父は、あまりのうれしさに、なみだをこぼしたといいます。

父は、どんな短い休み時間ものがさずに、こつこつ働いて、五十まいもの凧を作ったそうです。

赤いよろいを着、なぎなたをかかえ、きりりとはちまきをしめ、目をつり上げ、口をきゅっと結んだ、美しい女大将の顔……それが五十まい。

「父ちゃん、日本に残したあたしたちのことを思いながら、一まい、一まい、心をこめて、巴御前の、いいえ、友江の絵をかいたんだよ、きつと。」

と、母は、よく言っていたものです。

その凧をあげた時のそう観さといったら。

戦友たちは、みんな手をたたき、隊長さんもそう眼鏡でにこにこ見上げたんですって。

真っ青な冬の空にあがった五十まいの巴御前は、目鼻立ちこそ、少しずつちがっていましたが、どの顔もとてもかわいらしかったといえます。

巴御前の凧は、一日じゅうよくあがっていたそうです。戦友たちは、作業の合間に、それを見上げては、楽しんでいました。

国の子どもたちも、凧をあげているだろうか。おぶくろは達者だろうか。じいさんの神経痛がいたまなければいいが……。

凧を見ながら、兵隊たちは、いろんなことを考えていたといいます。

夕方になって、父が凧をおろそうとした時です。とつぜん、一発の銃声がひびき、たまが父のむねをつらぬいたんです。

父は、その場にばったりたおれ、父の手をはなれた凧は、ひもを引きずりながら、どこまでもどこまでも飛んでいってしまったそうです。

遠い山なみのみねに雪がかがやいていて、巴御前の凧は、夕焼けにそまりながら、ぐんぐん小さくなっていったそうです。

わたしは、その凧を見たわけではありませんのに、それが今でもはっきり見えるような気がします。

子どものころは、父を殺したという中国の少年兵をどんなにうらんだかしれません。

でもね、今考えると、その少年兵がどんなに腹を立てたか、分かるような気がするんです。だって、敵の凧が、わがもの顔で、自分たちの空を飛んでいるんですもの。ひょっとしたら、その人、自分の家族を日本軍に殺されたのかもしれないね。

敵も味方もなく、世界の国々のいろんな凧が仲良くあげられたら、どんなにいいでしょう。

父も、きつとそれを望んでいたにちがいません。

この六角凧を見ていると、顔も覚えていない父の、そんな夢が伝わってくるような気がします。